

第6回基本政策部会 議事録

1. 日時：平成26年11月13日（木） 10:00－11:40

2. 場所：内閣府宇宙戦略室大会議室

3. 出席者

（1）委員

中須賀部会長、山川部会長代理、青木委員、片岡委員、白坂委員

（2）政府側

小宮宇宙戦略室長、中村宇宙戦略室審議官、頓宮宇宙戦略室参事官、内丸宇宙戦略室参事官、森宇宙戦略室参事官、守山宇宙戦略室参事官

4. 議事次第

（1）新宇宙基本計画の工程表（素案）について

（2）その他

5. 議 事

（1）新宇宙基本計画の工程表（素案）について

新宇宙基本計画の工程表について審議を行った。審議の結果、新「宇宙基本計画」工程表（素案）にかかる基本政策部会の検討結果に関する宇宙政策委員会への報告については部会長に一任し、今後の宇宙政策委員会における取りまとめに反映させるよう調整していくこととなった。（以下、○質問・意見等、●回答）

○各府省の宇宙関連プロジェクトについて、工程表のどこかに紐づけができるようにすべき。（中須賀部会長）

○国際有人宇宙探査の矢印はグラデーションで薄くなっているが、その理由について説明できるようにしておくべき。（青木委員）

●国際有人宇宙探査については、米国からの提案があって、それを各国の間でどうするかにつき、これから議論していくような状況であるため、このような表現としている。（内丸参事官）

○光データ中継衛星の工程表の右側に、総務省の「地上衛星間光通信実証実験」

が四角囲みで記載されている。本事業は記載すべきと思うが、あえて四角で囲む必要はないのではないか。（山川部会長代理）

●本事業は運用とは少し違う性格の実証実験ということで、あえて別を書いていたが、総務省、文部科学省と相談の上、書き方を検討する。（森参事官）

○新宇宙基本計画(素案)本文の16ページには、「衛星リモートセンシング全体について、安全保障・公共・産業等の各分野における利用ニーズを明らかにした上で・・・継続的に検討を行い、以後のプロジェクトに反映していく仕組みを構築する」と記載されている。このニュアンスを工程表に加えたらどうか。（中須賀部会長、片岡委員）

○宇宙状況把握について、新宇宙基本計画(素案)本文の19ページで「米国戦略軍等との間で連携強化の在り方について協議を進め」と記載されているので、この部分を工程表にも反映したほうが良いのではないか。（片岡委員）

○1つの工程表に複数の線表があるときに、線表間の関係性を書いているところと書いていないところがある。記載振りを統一する必要があるのではないか。例えば、準天頂衛星について、初号機の後継機の打ち上げが行われると、それが矢印で上の4機体制の中に含まれることがわかるようにすべきではないか。（白坂委員）

○各工程表において、参考という形で記載されている線表は、ほかの工程表とのクロスリファレンスという意味で重要である。（中須賀部会）

○「デブリ除去システム技術実証」については、技術実証で終わって、次につながっていないことが気になる。本文にも先のことが書いていないので、工程表も合わせているのだろうが、先に何もつながらない実証に見えるので、何か次につながるものは書けないか（白坂委員）

○例えば、技術実証成果も踏まえた上で、上の宇宙状況監視という大きな柱に入れていくということがわかるように、そこにつながる矢印を引っ張ったらどうか。（中須賀部会長）

○線表において10年スパンで検討するとされているものがある。これは具体的に記載するのが難しいということか。（片岡委員）

●現段階では、具体的な年度やどの省庁が何をするか等が決められないものである。これは、10年間検討だけして何もしないということではなく、毎年工程表をローリングしていく中で、計画が具体化してきた段階で詳細に書いていくイメージである。（中須賀部会長）

○国際宇宙協力の強化に関する工程表について、二国間協力等には日EUとかシーレーン周辺国等いろいろあると考えられるが、ある程度見えているものは、ここに具体的な国名を書いても良いのではないか。来年度以降タスクフォースが立ち上がるので、ターゲット国を早く同定してオールジャパンで調査検討等を進めていかなければいけないと考える。（中須賀部会長）

●具体化しているところは書けるが、それ以外の対話や協議については予断をもって確定できないところがあるので、網羅的に書くのは控えた。（頼宮参事官）

●二国間対話等の話は、候補国の優先順位付けの問題等があるため、それらの点を検討した上で、どこの国とやっていくかを水面下で考えていくこととしたい。現時点で特定の国名を挙げることで、他の競合国から横やりが入ったり、名前の挙がっていない国から不満が表明されるなど、收拾が付かなくなるおそれがある。なお、インフラ輸出の観点で言えば、産業界の意向も知る必要があるので、ヒアリングの場を設けるべきではないかと感じている。（外務省）

○宇宙機器産業の事業規模として10年間で官民合わせて累計5兆円を目指すためには、やはり海外に売っていくというのを出来るだけ早く積極的に進めていく必要がある。（白坂委員）

○何かの修正を求めているわけではないが、海外展開の観点では衛星リモートセンシングとの連携があることを頭に入れておくことが大事である。素案46ページでは、「シーレーンに位置する国とアジア太平洋諸国を初めとした諸外国との間で、エネルギー、気候変動対策、災害等の各種課題の解決に資する人工衛星の共同開発及び人工衛星データの共同利用の推進」が今後大事な施策になると考えている。（中須賀部会長）

○素案25ページの宇宙科学・探査の工程表については、この背景にある灰色の矢印が示す意味を記載すべきではないか。（中須賀部会長）

（２）その他

新宇宙基本計画（素案）の政策項目の評価プロセス等について意見交換を行った。（以下、○質問・意見等、●回答）

○評価については、細かい個別施策ではなくて、複数の関連施策をまとめた単位で考えるのが良いのではないか。ただし、「宇宙政策の目標達成に向けた政策体系」にある３つの柱に対する貢献度合いを横通しで見るとか、分けた方が良いものについては細分化して見る等、臨機応変に対応すべきではないか。（中須賀部会長）

●工程表は項目ごとにつくっており、個々の工程表がローリングの対象になる。ただし、一緒に評価したほうがいいものは一緒にやるぐらいのイメージのほうがいいかもしれない。そのくり方については、まだ検討中である。（小宮室長）

●評価に関しては、政府の中で独立行政法人の評価方法に関する一部見直しの話が出ている。研究開発の評価に当たっては、進捗管理に加えて、成果の最大化がキーワードとなっている。いろいろな分野への波及効果とか、もしくは途中で生まれた新しい発見への対応とか、そういうものに柔軟に対応していく方向になっているので、この観点からも評価の仕方について議論を深めていきたい。（内丸参事官）

○評価を行うに際しては、改善点等を取りまとめるべきである。予算を減額するだけではなくて、うまくいってない施策に対して、どのようにすればうまくいくかといった、各省の取組を後押しするような観点で助言や提案も大事である。そのための体制や仕組みを考えていきたい。（中須賀部会長）

○評価の実施主体として、部会が一つの柱になっていくことが想定されるので、部会の所掌等についても改めて検討する必要がある。（中須賀部会長）

○評価をする能力を日本としても高めていかなければならないので、分野ごとに評価ができる人を育てていく必要がある。その観点で、例えば委員の継続性といったものをなるべく担保して、同じ人ができる限り長く見られるような体制作りも必要ではないか。（中須賀部会長）

●評価をするときに、あるエキスパートがいて、その人がずっと見ていくという

やり方もあるが、委員会的なもので見ていくやり方も考えられ、それぞれ一長一短がある。前者の場合は、多面的に見るのは非常に難しい。後者の場合は、多面的に見ることは可能であるものの、責任体制がはっきりしないという御意見もあろう。ただし、個別のプロジェクトに関する一義的な責任はプロジェクトを担当する省庁にあるとも言える。（頓宮参事官）

○分野ごとの特殊性もあるので、全部を同じ体制でできるとは限らない。したがって、まずは標準的な方式として、部会ベースでやりつつ、いろいろな問題・分野に応じて、少し柔軟に考える自由度があればいいのではないか。特に安全保障分野の評価については非常に難しいため、良い方法を考えていきたいと思う。（中須賀部会長）

○評価の時期については、6月から始まる概算要求検討の時期、12月の政府予算案調整の時期がマイルストーンになると思うが、前者について例えば4、5月に評価を行う等、もう少し前倒しできないか。（中須賀部会長）

●省によって、準備が整っているところと整っていないところがあると思う。4月や5月に評価するということは、その前から議論をする必要があるため、前倒しにも限界があるかも知れない。これまでの戦略的予算配分方針では、5月末までを目標に議論を取りまとめて、6月の頭に出すというやり方をしている。（頓宮参事官）

○例えば、基本政策部会の中にワーキンググループをつくり、その座長には継続的に最低5年ぐらい見てもらうという方法はどうか。各分野にそういう人材はいると思う。（中須賀部会長）

○評価においては、専門性と多面性の両方が必要である。継続的に、長期間に渡ってみることができる専門家を配置しつつ、委員会等を作って複数名で評価する形をとるべきではないか。（白坂委員）

●専門性と多面性の双方が必要とのご指摘であるが、各省の担当プロジェクトについて、専門性と多面性の両面について内閣府が見ていくのか、それとも、多面性は内閣府で見て、専門性は各省で見るといった形なのか、その分担も考える必要がある。（頓宮参事官）

○各省庁で見えるものももちろんあるが、プロジェクト単位ではなく、ある一定の

固まりで評価しなければ全体との整合性がとれない可能性がある。全体としても専門性というものは必要になると思う。（白坂委員）

●評価をするにあたっては、組み合わせが大事である。最近では、各省ごとに外部評価で個別の専門評価をやっているため、それをベースにした上で、宇宙政策委員会にしかできないような評価とは何かという点がポイントと思う。そういう意味では、施策の塊りで評価をするというところが大事なのではないかと考える。（内丸参事官）

●施策の固まりをどう考えるかが一つのポイントと思う。例えば新宇宙基本計画(素案)の政策体系に書いてある「宇宙安全保障の確保」に向けてうまく施策が進められているか見ていくという固まりで考える方法もあれば、例えば準天頂衛星が安全保障の観点からうまくいっているかなど個々のプロジェクトを見ていくという考え方もある。あるいはもう少し大きく考えて、測位やリモートセンシングという観点から見ていくという固まりのつくり方もある。新宇宙基本計画(素案)の政策体系は3本柱であるので、3つの政策についてそれぞれの進捗を見るという観点から評価していくべきと考える。（中村審議官）

○評価に際して、分野ごとに専門的な知識がどれぐらい必要になるかにも依存している。専門知識が必要ならば、それぞれのプロジェクトについて専門家の意見を聞きつつ評価し、その評価の中で、政策体系の3本柱の視点からどうなっているかを評価するのがいいだろう。一方で、横通しで見る分野も必要であり、そこをどう考えていくかはもう少し議論する必要がある。（中須賀部会長）

○今回の評価の話は予算に限る話ではなく、全体をどう評価し、どう工程表の改訂に結びつけていくかという一連のPDCAサイクルの話である。そのため、現時点では年2回の取りまとめを考えているが、どの時期にどのような作業をするかというのはもう少し詰める必要がある。（小宮室長）

○工程表をローリングで変えていき、次の目標をつくっていくことは非常に大事。次の年度のものが年末にできるというイメージであり、宇宙開発戦略本部に上げていくのは、非常に大事なマイルストーンである。（中須賀部会長）

以 上